

一朝の礼拝から 1—

眠れない夜には

詩編 4 編 1～9 節

みなさんは、夜、よく眠れますか。なかなか寝つけない人や眠りが浅い人は多いようで、薬局やスーパーで、快眠グッズやサプリメント、チョコレートや乳酸飲料などを見かけます。売れすぎて、販売が一時中止になったというニュースもありました。

私も寝つきがあまり良いほうではありません。これまでも眠るために、色々な方法を試してみました。「羊を数える」というのもその一つです。しかし、効果は感じられませんでした。調べてみたところ、一説によると日本語で数えるのには意味がないそうです。「sheep」の発音が呼吸に近いことが羊を数えるとよいといわれる理由のようです。

子どもの頃は眠れていたのに、大人になるとなぜうまく眠ることができないのか、考えてみました。寝る前に、短いお祈りをするのが、子どもの頃から変わらない私の習慣です。子どもの頃のお祈りは、神様にその日の出来事を報告し、無事に1日を過ごせたことに対する感謝のお祈りでした。一方、大人になってからは、これらに加え、「でも…」と、やり残したことや心残りのこと、困ったことなどを吐露しているように思います。こうして思い返してみると、子どもの頃と同じく、お祈りしているようで、ただ一日の反省を話していたと気づきました。

聖書には、「主の慈しみに生きる人を主は見分けてよび求める声を聞いてくださると知れ、おののいて罪を離れよ。横たわる時も自らの心とかたり、そして沈黙に入れ、ふさわしい捧げ物を捧げて、主に依り頼め」とあります。神様はいつでも私たちが求めれば答えてくださり、寄り添ってくださいます。みなさんも眠れない夜には、神様に語りかけてみませんか。

富永 祐子（日本文化学科）

一朝の礼拝から 2—

信仰について

ヘブライ人への手紙 11 章 1 節

時の流れは早いもので、あっという間に12月になり、クリスマスが近づいてきています。私にとってクリスマスは、数あるキリスト教の行事の中で最も重要だというイメージがあり、楽しい思い出が多くあります。今日はイエス様の誕生を祝うクリスマスを迎える前に、今一度信仰について考えを深めていこうと思います。

私にとって、現時点で信仰とは「神様を信じ、聖書の教えを守り、日々感謝を忘れず過ごすこと」です。実際信仰というものに対する解釈は人それぞれで、正答はないのだろうと思います。しかし、時折「私は今、本当に信仰をもって過ごしているのだろうか」と不安に思ってしまうことがあります。そこで、聖書で信仰はどのように定義されているのかを調べてみました。

まず聖書に書いてある「望んでいる事がら」とは、自分が望んでいることではなく、神ご自身、あるいはキリストご自身のこと、そして神によってもたらされる天における報いことを意味しているそうです。また、「信仰は天において受ける大きな報いを保証するもの」と記述されていました。ここでの報いとは、天国に行けるということです。また「目に見えない事実を確認すること」とありますが、見えない事実とは「将来に起こることを確かなものとしてつかむ手」であり、私たちはやがてこの地上での生活を終えた後、天国へ行くことができると確信しています。したがって、「信仰」とは、自分が願っているものを何回も自分に言い聞かせて、それがかなえられるようにと神に押し付けることではなく、神が言われたこと、また神が願っておられることを、そのまま自分の心に受け入れて、なんの疑いもせず、そのとおりにすると確信することなのです。

私たちは自分の知恵や力ではどうしようもないということが多々あります。それでもなおこの地上の何かを頼りにしていたのでは、生きる根底が揺らいでしまっている以上、どうしようもありません。しかし、信仰を持っていれば、どんなことが起こっても揺らぐことはないのです。今回信仰について調べ、学ぶことが出来たことを活かしつつ、また新たな気持ちでクリスマスを迎えようと思います。

今田 涼加（音楽学科 2年）